

「芸術の（再）歴史化：作品と資料体のあいだで」

【趣旨】

展覧会「THE PLAY since 1967 まだ見ぬ流れの彼方へ」の開催に合わせてシンポジウム「芸術の（再）歴史化：作品と資料体のあいだで」を開催致します。

「ハプニング」「パフォーマンス」などと呼ばれる、かたちに残らない表現を続けてきたプレイ。本展の準備は、プレイが残してきた膨大な記録（写真、映像、音声）や関連資料を調査するところから始まりました。絵画や彫刻のような「作品」のない状況で、そうした資料体を読み解き活動の全体像に迫る作業は、時に作家の息吹に触れるかのごとく親密で、時に謎解きのようなスリルがありました。そして単に情報を引き出すだけでなく、資料からもたらされる複数の意味を立体的に切り結んでいくような、調査研究する側にとっても極めて創造的なプロセスとも言うべきものでした。

プレイが活動を開始した1960年代の後半、芸術における非物質的な表現はそのピークを迎えたと言っても過言ではありません。自らの身体を用いて表現する「パフォーマンス」「ハプニング」「儀式」は全国各地の路上や野外で繰り広げられ、また他方では作品から物質性を完全に消滅させようとする作家も現れました。画家や彫刻家においてさえも、一回性の強い行為に実験的に取り組むことの少くない時代でした。

こうした非物質的表現は極めて魅力的ながらも、そのものがかたちとして残っていないという点において、調査研究の対象としては非常に難しい側面を持っています。調査は資料体を中心に進められることになりませんが、それらは時として既に散逸し失われ、あるいは極めて限定的なアクセスしか許されない状況であるからです。

しかし近年、こうした資料類に対する認識が大きく変化してきました。カタログやパンフレット、ポスターやチラシなどの印刷物、記録写真、記録映像、音声記録、作品制作やパフォーマンスに使用された資料の重要性が認識され、複数の大学や美術館がアーカイヴの構築に積極的に取り組んでいます。それと並行して、資料体の調査に意欲的に取り組むことで、これまで語られる機会の少なかった非物質的表現に光を当てるような研究が進められています。

本シンポジウムでは、資料の重要性が改めて認識され、アーカイヴ整備が進行しつつあるこうした傾向のなか、展覧会などの調査を通じて芸術が（再）歴史化される状況そのものに目を向けます。資料体は創造的な読解を待っています。それはいかにして未来の研究へと開かれ、研究者はこのことにどのように取り組むのでしょうか。